

アメリカ文学の外枠（1） ——「均質化」及び「生物＝機械」

大野 真

本稿では、アメリカ文学の個々の作品に関する分析（文学の内部）というよりも、様々な文学作品の背景となっている社会思想的諸概念（文学の外枠）について、比較的自由的な見地から論じてみたい。まず今回取り上げるのは、アメリカ社会の「均質化」及び「生物＝機械」の概念である。

1. アメリカ社会の「均質化」—— 道路、商品、平均人、生活の標準化

現代は「国際化」の時代と言われる。しかし、「国際化」と言われている事態の内実は世界全体を均質に「アメリカ化」することではないか、という批判も多い。

桜井哲夫は『アメリカはなぜ嫌われるか』において、旧大陸ヨーロッパの思想家たちがアメリカを批判的に論じた様々な文章を紹介している。例えば、フランスの思想家アレクシス・ド・トクヴィルは、『アメリカにおける民主主義』の第2部（1840年）において、アメリカ人が個人主義的人生観を持つにもかかわらず、社会を運営する際には多数派によって支配されてしまうという逆説を指摘している¹。激動する社会であるアメリカ合衆国も、結局は、金銭への執着という同じストーリーに支配される単調な社会に見えてしまうのだ。

桜井は、このような1830年代アメリカ社会に対するトクヴィルの指摘を、「すべてを均質化しようとするグローバリズムに対する予感とも言える発言」（桜井35）という具合に現代の問題として受けとめ、さらにマルクスを参照して、このような均質化を資本主義の論理そのものとして捉える。「そして、トクヴィルが論じた新世紀アメリカに代表される近代産業社会（資本制社会）の論理とは、商品、貨幣、資本という様式の中にすべてを投げ込む『均質化（同質性）』の論理だと述べたのは、カール・マルクス（1818-1883）です」（桜井35）。アメリカは資本主義の実験場といえるが、アメリカ社会と資本制社会の共通の特徴としては「均質化（同質性）」があり、その極限的形態が（すべてを等しくアメリカ化しようとする）グローバリズムなのである。

このような均質化が目に見える空間的な形として現われたものが、アメリカの道路である。桜井は、ドイツの哲学者テオドール・W・アドルノによる「アメリカの道路には表情がない」という批判に注目する。アドルノにとって、アメリカのただっ広くどこまでも同じように続く道路は、「アメリカ社会の人工的で、無機質な気質の象徴」としての「均質化された空間」なのである（桜井63-4）。

アドルノのアメリカ論としては、ジャズや推理小説に対する批判もよく知られている。とくにアドルノが気に食わなかったのは、ジャズと推理小説が大衆用の売り物として規格化され、一定の「型」にはめられている点である。「軽音楽は先進工業国では規格（スタンダード）化によって定義される」（アドルノ61）のだ。アドルノにとって、ジャズと推理小説（つまりアメリカ大衆文化）は、「経済市場向けの商品」（桜井68）にすぎない。

アメリカ資本主義の特徴であるこのような均質化、商品化、「型（パターン）」化は、アメリカ人という人間、あるいはアメリカ流のデモクラシーに対する批判となっても現われる。例えば、イギリスの批評家マシュー・アーノルドは、1883-4年と1886年との2度アメリカを旅行し、『合衆国の文明』（1888年）というアメリカ論を書いた。その中で、アーノルドはアメリカのデモクラシーの利点を一面では認めつつも、合衆国成立以降には「高貴さ（distinction）」をもつ人物がおらず、リンカンによって代表されるような「平均人」が賛美されていると指摘している（Arnold

360. 亀井 39-40 参照)².

つまり、アメリカの民主主義を代表する人物であるリンカンも、アーノルドによれば「平均人」と見なされてしまうのである。アメリカの民主主義は平均化の傾向を免れない。

これをはっきりと表わしているのが、「平均民主主義 (average democracy)」という概念である。平均民主主義とは週間評論・文芸誌『ネーション』(1870年代)のL・ゴドキンらによるものだが、マーク・トウェインは『金めっき時代』のなかで、このような平均化を徹底的にからかっている(坂下75)。平均化・平準化とは俗物化の危険性をはらんだものなのである。

なお、歴史家によれば、1880年代のアメリカにおいて衣服・生活様式の標準化が進行し始めていた。「1880年代のニューヨーク住民の服装と中西部などの内陸地域住民の服装には、生活レベルが同じであればデザインなどにはほとんど差異がなかった」(紀平・亀井200)という。

その背景としては、基礎的インフラストラクチャーの完成による国土の統合がある。つまり、アメリカ社会は1880年代後半までには、「10日程度を費やせば国土のどこにでも行くことができるほどに、鉄道と、さらに電信(いずれは電話)によって緊密に結びついた統合的、有機的社会」へと変貌していたのだ(紀平・亀井197)。これによって、大量流通社会への移行がなされ、アメリカは世界第一の工業国への道を歩み出した。しかし、このようなアメリカ資本主義の発展と同時に、人間と生活の標準化、平均化、均質化も進行していったのである。

さて、ここまで主として旧大陸ヨーロッパの思想家たちによるアメリカ批判を取り上げ、おもにアメリカ社会の均質化にまつわる問題点を挙げてきた。いわばアメリカ社会を外側から見た批判を取り上げてきたのである。

しかし、ここまで読んだ読者はやや違和感を覚えるかもしれない。つまり、以上に挙げた問題点は、そのままアメリカ社会の魅力にもなっているのである。例えば、亀井俊介のように、アメリカの巨大な空間である荒野に魅せられた研究者は数多い。私見では、荒野とは、日本流の箱庭的自然とは異なり、巨大な等質空間としての自然である。

また、アドルノが批判したアメリカの道路も、『路上にて』というビート族文学の代表作の題名が示す様に、放浪するビート族にとっては魅力的な場所である。つまり、巨大な等質空間は、ビート族のようなはみだし者(異質性)を包み込むような懐の深さを持っているのだ。

さらに、司馬遼太郎は『アメリカ素描』において「労働を商品として、余分な人間的感情なしにくっきりと成立させたのは、当時[19世紀末-20世紀初め]のアメリカ労働市場である」(司馬122)という具合にアメリカ社会の商品主義を指摘しているが、それと同時に、「だれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」(司馬39)を指す「文明」を体現するアメリカの魅力に引き付けられてもいるのである。司馬の言う「普遍性」とは、どこでも同じであるという「均質性」の合理的な側面を強調したものである。

さらに、アメリカ社会が均質的であるという批判があると同時に、多民族の移民からなるアメリカ社会の多元性・雑種性も指摘されている。アメリカを代表する音楽であるジャズは雑種の音楽であり、西洋の楽器と黒人音楽の要素が融合したものである³。つまり、アメリカ社会の「均質性・同質性」は、それと外見上は相反するような「多様性・異質性」の側面も含みうるものなのである。(もちろん同質性は異質性を排除しようとする場合も多く、同質性と異質性との間の緊張関係の上にアメリカ社会は成立しているのだが⁴。)

以下の章では、これらの課題を念頭に置いた上で、アメリカ社会の均質性という特徴を、さらに別の角度から考えていきたい。

2. 均質化と大量複製——フォードと「生物＝機械」の思想

1913年8月に、ヘンリー・フォードは、それ以前の生産記録の二分の一の早さである5時間50分で、T型車を生産することに成功した。組立線(アセンブリー・ライン)の技術がこのような生産時間の短縮を可能にしたのである。その後生産時間はさらに短縮され、1920年には全世界の自動車の二分の一はフォード製になっていた。

ロデリック・ナッシュは『人物アメリカ史(下)』において、フォードの理念を紹介している。当時の自動車が金持ちの玩具であったのに対し、フォードは「私は大衆のために自動車を作るのだ」と宣言した。そのためには自動車を安く製造する必要があるが、それにはさらに、すべての自動車を同じに作る必要がある。「自動車を作る最良の道は、一台の自動車を次の自動車とまったく同じに作ること、すべてを同じに作ること、工場からまったく同じ自動車が出て来るようにすること——ちょうどピンがピン工場から出てくるときは、すべてのピンが同じ姿であるように」(ナッシュ118)。アメリカ資本主義の論理である同質性は、フォードのT型車において、オートメーションによる同じ型の大量生産という形態をとることになったのである⁵。

ナッシュは、フォードの時代の思想的背景として、米国の発明家・技術者であり科学的経営管理法の父であるフレデリック・W・テイラーの考えを紹介している。効率を神格化したテイラーは、でき得る限り人間を機械に換えることを基本原則とした。「彼の考えでは、機械は人間より正確であった——隣人と無駄話もせず、病欠もせず、賃金の値上げを求めてストライキを打ったりもしない。…組立線に乗って目の前を過ぎて行く同じ六つのねじを際限なく締めつけることだけが唯一の仕事ならば、人間は驚くほど高い能率を発揮するだろう⁶」(ナッシュ119)。

フォードは、効率を追求したオートメーションによるT型車の大量生産という形でテイラーの思想を現実に具体化した。オートメーションは同質の製品の大量複製を可能にすると共に、労働者を機械的プロセスの一部として扱うことによって人間と機械をも同質のものとしたのである。

人間と機械を等しいものとしたフォードは、自然と文明を対立させて考えてはいなかった。「道路と自動車については、フォードは自然に対する脅威としてではなく、普通のアメリカ人が自然と触れ合いに行くための手段と見なししていた。機械と楽園とは両立しないものではなかった」(ナッシュ135)。

自然と文明の関係については、亀井俊介の興味深い指摘がある。亀井によれば、アメリカ人のヒーロー像は「荒野を開拓する者、荒野に文明を建設する者」(亀井17)と要約される。アメリカ人のヒーローは、未開の自然である「荒野」というエデンに生きるアダムのように自然のままの人間でなければならないし、それと同時に、何らかの意味で「文明」の建設に貢献しなければならない。つまり、アメリカ人のヒーローは、「自然志向と文明志向」(紀平・亀井307)という相互に矛盾した二つの特質を抱えているのだ。

複製の大量生産という形で同質性を極限まで推し進めたフォードは、自然と機械文明という矛盾する側面を合致させることを目指したのである。

3. 「生物＝機械」——ウィーナーの<サイバネティックス>

テイラーやフォードが理想とした人間機械論をさらに推し進めたものが、MITの数学者ノーバート・ウィーナーの提唱した<サイバネティックス>の思想である。

ウィーナーは、1948年に出版した『サイバネティックス』の中で、動物と機械における制御と通信の理論を展開した。『デジタル・ナルシス』において情報科学のパイオニア達の姿を活写した西垣通は、サイバネティックスのことを、「『生物も機械も、情報という観点から見れば同じだ』という、壮大かつラディカルな仮説」(西垣iv)と呼んでいる。「<情報><メッセージ><コミュニケーション><フィードバック>などといった、現代社会の基本コンセプトはすべてサイバネティックスに集約されている。それは、いわば、二十世紀後半のテクノロジー・パラダイム

を決定したとさえ言えるだろう」(西垣 171)。

サイバネティックスやシャノンの情報理論といった情報科学を具体的なテクノロジーとして現実化したのが、〈デジタル・コンピュータ〉である。

コンピュータの数学的本質を明確にしたのはアラン・チューリングであるが、チューリングの仕事に通底するものとして、西垣通は「人間と機械との同質性」(西垣 44) という信条を指摘する。現代コンピュータの祖型にあたる計算機械モデルである〈チューリング・マシン〉とは、「機械的な仕掛けで人間の思考(真理の探求)がシミュレートできる」(西垣 44) ということなのである。さらに、チューリングは機械を生物のように生殖・発生させるという発想に取りつかれてもいた。

また、現代コンピュータの開発に最大級の貢献をしたジョン・フォン・ノイマンは、驚くべき計算能力と記憶力を持った数学の天才として知られているが、その能力ゆえに「コンピュータのような人間」という形容が当てはまるような、人間とコンピュータの「交点に立つ人物」(西垣 10) である。

この様に、サイバネティックスの思想とコンピュータにおいては人間と機械の同質性が強調されているのだが、注意してみると、この同質性には奇妙な点がある。西垣通は、人間と機械とが交錯する過程において、本来無機的な存在である機械の中に、欲望その他の人間の要素が紛れ込むことを指摘する。「率直に言ってサイバネティックス=コンピュータ文化とは、誕生したときから奇態なしろものだった。——思考する機械。脳神経と電子通信制御系との限りない接近。——それは肉体のいわば内側に入り込み、我々が世界を認知し、そこに意味や価値をみとめる基本的仕組みにまで触角をのぼす。だから情報科学が、人間の欲望や倫理やエロスと交錯する問題次元を持つのも、いっこう不思議なことではないのである」(西垣 v)。

とくに欲望は、制御しきれない、どうにもならない側面を持つ。欲望はシステムとしての同質性には収まりきれないものではないだろうか。

なお、「生物=機械」を説いたウィーナー自身は、きわめて人間くさい人物であった。不器用な不適応者としての前半生を送り、科学者として名を成した後も、科学技術の軍事利用や政治的全体主義に対して抵抗し続けた自由人であった。また、研究者としては、自然界の〈混沌〉とした側面に惹かれていた。つまり、同質的なシステムには収まりきれない異質の「個」であったのだ。

しかし、システムの中に紛れ込む個の問題はとりあえず保留とし、さらに別な側面から、アメリカ資本主義の同質性を考えてみたい。

4. 大衆と機械、動物

フォードがT型車の大量生産を開始した時、大衆のための車を作ることを目的にしていたことを想起したい。同じ質をもつ型の大量生産や人間機械化論は、大衆社会をその基盤としている。大衆とは、個体的質を消却した同質性としての集団の人間群であり、それゆえ「機械」の比喩になじみやすいのである。

宮本陽一郎は、『モダンの黄昏』において、「隠喩としての機械が大衆表象をめぐる文化闘争の中で果たした役割」(宮本 15) に注目して、1930年代のニューディール政策時代を分析している。「集団を機械に見立てるまなざしは、まさにニューディール政策の核のひとつとなる。ニューディーラーたちは、経済システム全体をひとつの機械に見立ててこれを調節するという政策をとるのである」(宮本 16)。

このようなニューディール政策時代における「大衆=機械」論が具体的に目に見える形で現われた例として、宮本はバズビー・パークレーのミュージカル映画を挙げる。バズビー・パークレーの演出は、「画面を埋め尽くしたコーラス・ガールたちの徹底的に規格化された身体が、機械的な精密さで幾何学的模様を作り上げていく」(宮本 173)

ことを特徴としており、「複数性と幾何学的な美への偏執とでも呼ぶべき美学」(宮本 173)に支配されている。バズビー・パークレー独特のショットは、「コーラスガールの数を誇示すると同時に、それを単一の抽象的な秩序のなかに収めるものである」(宮本 186)。これを宮本は、「単一性と複数性、あるいは個と全体性のパラドクシカルな戯れ」(宮本 186)と呼ぶ。

つまり、「機械」としての大衆は、同質的であるがゆえに、多人数いても一つの秩序にまとめることができ、多と一、あるいは集団と個人といった対立的関係が解消され、多が一に、集団が個人に等しくなってしまうのである。

ところで、宮本は大衆を表わすものとして「機械」以外に「キング・コング」を挙げていることが注目される。ニューディール政権が誕生した年である 1933 年に製作された映画『キング・コング』では、エンパイア・ステート・ビルにキング・コングが攀じ登り頂上で咆哮する場面が有名である。キング・コングという「野獣」の身体は、文明によって統御され得ない力、同質的なシステムに収まりきれない異質性を表わすように見える。しかし、結局のところ、「野獣」のもつ御しがたい力も、「機械」的な同質性によって統御されてしまうのである。「キング・コングのカリスマ的な身体が表象した御しがたい『大衆』は、機械という隠喩のもとに、次第に統御されていくことになる」(宮本 16)。

つまり、「動物」の比喩は、「機械」とは異なり、本来は同質性に収まりきれない異質性を表わすものであるが、同時に結局のところ「機械」に接近することで、同質性によって統御されてしまう危うさも持っているのだ。「動物」の比喩は「機械」の比喩と合わせて検討する必要があるだろう。

5. アメリカ文学作品における人間―動物―機械

「動物」の比喩は、例えば、アメリカのフロンティア時代の民間伝承に登場するフォーク・ヒーローであるディヴィ・クロケットに見られる。ディヴィは、半ば未開の奥地であったテネシー出身の開拓者で、鉄砲の名人として知られるが、こんな駄法螺を吹いている。「おれは奥地から出てきたばかりの、あの有名なディヴィ・クロケット。半身は馬、半身は鱉、すっぱんの血もちょっぴりまじっているぜ」(亀井 66)。亀井俊介によれば、アメリカ人のヒーロー像には「荒野を開拓する者、荒野に文明を建設する者」としての性格があるので、「荒野＝自然＝動物」的要素が「ヒーロー＝人間」に入り混じることになるのであろう。

ディヴィ・クロケットの「ほら話」(トール・テール)は西部のユーモアの源流になったが、アメリカ文学の作品中には、人間と動物のイメージの交錯がしばしば登場する。

有名な例としては、ジョン・スタインベックがある。スタインベックのスタンフォード大学時代の専攻は海洋生物学であった。(結局資力が続かず中退してしまったが。)スタインベックを始めとするアメリカ小説のファンであった司馬遼太郎は言う。「生物! スタインベックの文学には、人間を生物のレベルという足もとから見るところがある」(司馬 59)。人間を生物のレベルで見ることによって、スタインベックの作品には、「現実という牛肉の大塊にいきなり五指を突きさし、肉塊をむしりとってずしりと台にのせる」(司馬 54)ような魅力が生まれた。しかし、司馬が指摘しているように、とくに『怒りのぶどう』などで描かれているのは「商品」としての労働力の姿である(司馬 56)。「商品」として労働力を見た場合には、人間は個性を失った同質的な集団に還元される。つまり、スタインベックにおける動物の比喩は、同質的な集団としての人間を強調するものなのだ。

しかし、「動物」の比喩は、同質的なシステムよりもむしろ個体的な異質性を表わす場合に適切である。ジャック・ロンドンの『野生の呼び声』では、シェパード犬のバックが主人の死を契機として、ただ一匹荒野の中に残され、それまで自分の内に眠っていた野生の呼び声に応えて、人間の文化を捨てて狼の大将となる。ここでは、人間の作り出した文明というシステムからの逸脱として動物的野生が捉えられている。

大胆な性を描いたヘンリー・ミラーの『北回帰線』においても、動物的野生はシステムからの個体の逸脱を表わす。「…わたしは決心した、もう何のものにもすがらまい、何事も当てにすまい、これからは一個の動物として、猛獣として、浮浪者として、略奪者として生きてゆこう、と」（亀井俊介訳）。

システムからの逸脱としての動物的野性という点で注目されるのは、女性作家における獣性の扱いである。巽孝之は『アメリカ文学史のキーワード』において、何人かの女性作家の作品に登場する動物や獣性の扱いを紹介している（巽151）。例えば、クリオール種の雑種的文化の中で育ったケイト・ショパンは女性の覚醒を描いた小説『目覚め』（1899年）によって著名であるが、彼女は19歳の時に、檻の中で生まれ育った動物が外の世界に出るという短編「解放」を書いている。また、代表作『目覚め』の第28章でも、女性主人公エドナは自らの女性性を「美と獣性からなる怪物」に喩えている。つまり、女性作家における獣性は、男性の作り出した抑圧的システムに対する反逆であるが、同時にそれは怪物というグロテスクな姿を取らざるを得ないのだ⁷。

なお、黒人もしばしば動物に喩えられる。伊藤昭子は、ポーの「黒猫」やフォークナーの『アブサロム、アブサロム！』などのゴシック的小説中の動物的比喩を検討し、「このような動物と人間の混同は流行を見て、飼いならされた猫や犬が本性を剥き出しにするときは獣（beast）と呼ばれるが、黒人奴隷たちもしばしば獣と見なされそのように扱われた」（伊藤23）という。女性や黒人は長い間アメリカ社会のシステムにおける異質的要素であったので、女性や黒人に対する動物の比喩はとりわけ重要である。

なお、筆者が個人的にとくに興味を持っているのは、人間を動物に喩え、さらに機械や無機物にも喩えるような描写をした作品である。そのような作品においては、人間と動物・機械の区別が取り払われて、全てが同一平面上に並んでいる。

その例としては、ダシール・ハメットによるハードボイルド探偵小説の代表的傑作『マルタの鷹』が挙げられる。「スベードの狼のような口つき」（10）「ダンディ警部補の機械仕掛けのような視線」（18）といった描写では、人間が動物さらには機械に喩えられる。とりわけ主人公の探偵サム・スベードの身体は、あごの形や口元など多くの個所が「V字形」（3）で表わされ、幾何学的な比喩を用いた身体描写がなされている。

ウィリアム・フォークナーの作品中でも、ハードボイルド探偵小説の影響が濃いとされる『サンクチュアリ』では、「トミーの猫のような眼」（82）「機械仕掛けのような鳥の鳴き声」（5）という具合に、人間は動物に、さらには生物が機械に喩えられている。ハードボイルド探偵小説や『サンクチュアリ』は現代文明における暴力や欲望を描いたものであるが、そのような世界において人間はデフォルメされ、動物や機械と同一平面上に置かれることになるのだ。

このような、人間を動物や機械と同一平面上に置くことによってグロテスクな効果を挙げる手法を意図的に用いた例として、フラナリー・オコナーの『賢い血』がある。この作品においても、登場人物が動物に喩えられ、さらにはぬいぐるみを着てゴリラに変身したりする（197）。あるいはまた、車という機械が主人公の分身の様に扱われている。このように人間存在を動物や機械の方向に意図的に歪ませることで、オコナーはより深い真実を探ろうとするのである。

6. 「生の機械化」の効用 — ベルクソンとルカーチ

こうした人間・生物の機械化を扱う際に参考となるのは、フランスの哲学者アンリ・ベルクソンの『笑い』であろう。ベルクソンは「笑い」の本質を「生の機械化」（ベルクソン96）あるいは生命の「物」化（ベルクソン59）として捉えた。例えば、身振りの物真似が滑稽な効果を挙げるのは、人間の動作における機械的な要素を強調するためである。

ベルクソンの言う「生命の機械化・物化」による笑いの効果は、チャップリンも活用しているように思える。例えば、チャップリンは「壁にぶつかったあと反射的に帽子をとって壁に向かって謝る」（井上 86）という工夫を笑いの芸に加えた。つまり、壁という「物」を人間扱いしてみせるのである。オートメーションに象徴される機械文明を諷刺したとされる彼の作品『モダン・タイムス』にせよ、機械の部品に成り果てた人間たちの姿を笑いの鍵として活用しているのだ⁵。

ベルクソンのいう「生命の機械化・物化」と関連して、ハンガリーの文学史家・哲学者ジェルジ・ルカーチの物象化論が参考になる。ルカーチは『歴史と階級意識』の中で、現代の機械化された労働過程について次のように述べている。「そこで人間は、客観的にもまた労働過程に対する態度においても、一つの機械的体系のなかに組みこまれるのである」（ルカーチ 172）。「こうして時間はその質的な、変化する、流動的な性質を失う。すなわち時間は、厳密に限界づけられ、量的に測定できる連続体へ、量的に測定できる『物』（物象化され、機械的に客体化され、人間的な全人格から厳密に切り離された労働者の『活動』）によって満たされた連続体へ、つまり一つの空間へと凝結するのである」（ルカーチ 172）。以上のルカーチの見解は、ベルクソンの考えと非常に共通点が多い。

しかし、文学の立場にとっては、「生命の機械化・物化」は必ずしもマイナス面ばかりではない。例えば、人間を機械や物の方向に歪めることで、（往々にしてグロテスクな）笑いの効果を挙げることができる。さらには、人間を機械や物と同一平面に置くことにより、伝統的な人間観よりもさらに広い立場から、人間存在をより深い次元で扱うことが可能となる。また、女性作家にとって獣性が解放の鍵となっていたように、機械との交流によってフェミニズムも新しい力を持つ（ダナ・ハラウェイの〈サイボーグ・フェミニズム〉）。ジャズの発展期においてルイ・アームストロングが「トランペットをそのまま肉声に置きかえる」（油井 269）ことで器乐的なスキット・ヴォーカルの新次元を切り開いたように、機械や物との交流は生命に新しさをもたらし、また逆に、機械や物の側も生命を持つ「生けるモノ」となるであろう。

注

- ¹ とくに、第7章「合衆国における多数（派）の万能と、その諸結果について」を参照。「民主制の政府において、多数（派）の支配の絶対性は、その本質である」（471）と述べたトクヴィルは、アメリカでは多数派が思想に厳しい枠をはめており、精神の自由がないため、アメリカには偉大な作家が生まれないのだとしている（480-82）。
- ² アーノルドにとって、興味深い文明の条件は「高貴さと美」（Arnold 358）であるから、平等ではあるが「同質的」（351）な合衆国は文明の重要な条件を欠いているのである。
- ³ ジャズの発祥地はニューオーリンズとされているが、その地はフランス系のクリオール文化のような雑種文化の地として知られている。
- ⁴ 例えば、1830年頃からジョン・カルフーンの提唱したアメリカ南部における「同質者民主主義（homogeneous democracy）」においても、同質者とは、黒人や異民族を排除したものにほかならない（坂下 75）。同質性はしばしば虚構としての「国民性」という集合的なアイデンティティーの形をとるが、宮本陽一郎は『偉大なるギャツビー』を論じる際に、このような集合的アイデンティティーによって対立や差異がむりやり解消されてしまうことを指摘している（宮本 68）。つまり、虚構としての全体的同質性によって異質性が排除されてしまうケースである。こうした個と全体の矛盾について、三杉圭子は以下のように述べている。「個々の構成要素がその独自性を尊重しようとするとき、全体の統一性は極めて危ういものとなりうる。ここにリベラリズムが内包する自家撞着の問題がある」（三杉 95）。
- ⁵ アドルノが批判したジャズや推理小説の「型」も、大量生産可能な大衆向けの商品としての側面である。アメリ

カにおける「型」は複製による大量生産と切り離せない。

- ⁶ なお、発明王エジソンも同様の人間機械論に取り付かれていた。「アメリカ人のあいだでは、エジソンは生涯一睡もしなかったと信じられていたが、そのような見方を助長したのが、間もなく人間は進化して睡眠を必要としなくなるだろう——まるで機械のように——という彼自身の予言であった」(ナッシュ 116)。
- ⁷ 「アメリカのイヴ」に相当する女性たちは悲劇的な運命を辿ることが多いことを亀井俊介は指摘している(亀井 86)。イヴには無垢なアダムを誘惑した罪の女という聖書的な観念が付きまとうため、その役割は歪んだものにならないを得ないのだ。
- ⁸ 『モダン・タイムス』に対しては「テクノロジー肯定的な美学に支えられたテクノロジー批判」(宮本 140) という評価もある。

引用文献一覧(洋書はアルファベット順、和書は50音順)

- Arnold, Matthew. "Civilization in the United States." R.H. Super ed., *The Last Word*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1977. 350-69.
- Faulkner, William. *Sanctuary*. NY: Vintage, 1987.
- Hammett, Dashiell. *The Maltese Falcon*. NY: Vintage, 1992.
- O'Connor, Flannery. *Wise Blood*. NY: Noonday, 1995.
- アドルノ、テオドル・W、『音楽社会学序説』高辻知義・渡辺健訳、平凡社、1999年。
- 伊藤昭子、「ポー、フォークナー、ゴシックアメリカ」『フォークナー』第3号、松柏社、2001年、17-32。
- 井上一馬、『アメリカ映画の大教科書(上)』、新潮社、1998年。
- 亀井俊介、『亀井俊介の仕事1・荒野のアメリカ』、南雲堂、1987年。
- 紀平英作・亀井俊介『世界の歴史23・アメリカ合衆国の膨張』、中央公論社、1998年。
- 坂下昇、『アメリカニズム』、岩波書店、1979年。
- 桜井哲夫、『アメリカはなぜ嫌われるのか』、筑摩書房、2002年。
- 司馬遼太郎、『アメリカ素描』、読売新聞社、1986年。
- 巽孝之、『アメリカ文学史のキーワード』、講談社、2000年。
- トクヴィル、アレクシス・ド、「アメリカにおけるデモクラシーについて」『世界の名著33』岩永健吉郎訳、中央公論社、1970年、435-550。
- ナッシュ、ロデリック、『人物アメリカ史(下)』足立康訳、新潮社、1989年。
- 西垣通、『デジタル・ナルシス——情報科学パイオニアたちの欲望』、岩波書店、1997年。
- ベルクソン、アンリ、『笑い』林達夫訳、岩波書店、1976年。
- 三杉圭子、「冷戦とリベラル・イマジネーション——ソール・ペローの『オーギー・マーチ』」『冷戦とアメリカ文学——21世紀からの再検証』山下昇編、世界思想社、2001年、78-98。
- 宮本陽一郎、『モダンの黄昏——帝国主義の改体とポストモダニズムの生成』、研究社、2002年。
- 油井正一、『ジャズの歴史物語』、スイング・ジャーナル社、1972年。
- ルカーチ、ジェルジ、『歴史と階級意識』城塚登・古田光訳、白水社、1991年。